



ゆるふわギャル怪人の
誘惑と性技に堕とされる
正義のヒーローの話

体験版

成人向け
R18
Adult only

presented by
神倉流同好会

小説

M向け

ゆるふわギャル怪人の誘惑と性技に堕とされる正義のヒーローの話 体験版

ヒサミコウ

神倉流同好会

表紙・挿絵

なふたん

目次

プロローグ	ヒーローコンピと女怪人	7
第一章	ゆるふわギャル怪人の誘惑	27

プロローグ ヒーローコンビと女怪人

人口八万人ほどの地方都市、ときほら鳥木原市。

少し前まで平和そのものであったこの町は現在、悪の組織の怪人によって脅かされるようになっていた。

「う、うわーっ！」

「デビルローゼス団だ、逃げろ！」

市内中心部にあるイベントホールにて、怪人を中心に戦闘員がなだれ込んできたことで、中にいた市民たちが逃げまどっている。

「ふふっ、怪人どころか戦闘員にすら何も抵抗できないなんて、人間ってよっわい♪」

その様子を、ホールの二階の手すりに立って、ピンク色のロングヘアをした女が見下ろしていた。

髪色と同じピンク色のチューブトップとタイトミニスカート、という露出度の高い格好をしており、グラマーな体型をした女だ。背中からコウモリのような翼が生えており、彼女も怪人であることが見て取れる。

彼女は柔らかな笑みを浮かべている。その顔には攻撃的な雰囲気はなく、ただひたすら楽しげだった。

「さあ怪人ちゃん、このホールを制圧しちゃってね♪」

手のひらから禍々しいダークエナジーを放出し、怪人に遠隔指令を出す。

「グハハハッ！ このホールは我々、デビルローゼス団が占拠する！」

筋骨隆々で角が二本生えた巨漢の怪人が戦闘員を率い、ホール内の人間を人質に取りながら制圧していく。

「ここを街の制圧拠点としてくれるわ！ 手始めに、この場の人間どもをすべて捕らえて戦闘員として改造してくれようぞ」

「戦闘員にされるなんていやーっ！」

「誰か助けてくれー！」

次々と市民を捕らえてゆく怪人や戦闘員たち。阿鼻叫喚の状況となる中、ピンク髪の女は満足げにその様子を眺めている。

「うふふ、いい調子かも♪」

「調子はどうですの、ピンクヘイズ？」

虚空から、赤いドレスを身にまとった女が現れ、ピンクヘイズと呼ばれた女怪人の隣に立つ。

「あ、スペクトラちゃん、おつかれ。んー、このままならうまくいくと思うんだけどー、いつも通りならそろそろ来ちゃうかもー？」

「そうね……あの鬱陶しい奴ら、すぐ嗅ぎつけてくるものね」
長い金髪の縦ロールを背中に流した、ゴージャスな髪型をしたスペクトラという女性には、冷たい表情でホールを見下ろす。

「今回の作戦はわたくしの進言で、とにかく一撃のパワーを高めた怪人を作ってもらったのだから、絶対に成功してほしいものですわ」

それに対し、ピンクヘイズと呼ばれたほうの女はもう一度口

を開きかけた。

が、そのとき。

「そこまでだ!」

「むっ? なにやつ!」

鋭い声が飛び、怪人やピンクヘイズたちがその声がしたほうへと振り向く。

すると、ホールを見下ろす階段の中央あたりに、一組の男女が立っていた――

「正義の味方、グロウイーグル参上!」

「同じく、シャインスパロー!」

「悪の組織デビルローゼス団、それ以上の狼藉は許さん!」

グロウイーグルと名乗ったヒーローのほうは、上半身は濃い青、下半身は白のびったりしたバトルスーツを身にまとい、驚の頭部をモチーフにしたような形のヘルメットを被っている。それなりに上背があり、鍛えられた体であることが分かる青年のくらしい男だ。

シャインスパローという女のほうは、赤のレオタード型のスーツに、メタリックな膝当てとブーツを装着、頭部は額当てを装着していてゴーグルで目を隠している、という格好だ。すらりとしていてスタイルのいい若い女性という雰囲気である。

「現れたな、グロウイーグルにシャインスパロー! こしやく

なやつらめ、また我らの邪魔をするつもりか!」

「当然だ。このホールを悪の拠点にしようなどと、街の平和のために許すわけにはいかない。覚悟!」

グロウイーグルは飛び上がった。

「必殺! グローリー・ウイング!」

グロウイーグルが光の翼を広げ、怪人に向かって空を駆ける。さながら光の弾丸と化したイーグルは、そのまま目にも止まらぬスピードで怪人へと突撃する。

「うっ! おのれ、戦闘員ども、ガードしろ!」

「遅いわよ!」

シャインスパローの声が響いたかと思うと、彼女は目にもとまらぬスピードで次々と戦闘員を屠り、気絶させてゆく。

「ぐはっ!」

「み、見えない……ぎゃああっ!」

シャインスパローはキックや光のムチなどを駆使し、次々に戦闘員を倒してゆく。

「うぬっ、これはまずいっ!」

怪人は飛び退り、イーグルの突進をかわす。

「おっと、これ以上ホールを破壊するわけにはいかな!」

ホールを傷つけないよう、必殺技を中断したイーグル。そこに、怪人は狙いを定めて攻撃を放つ。

「ばかめ、くらえ! 暗黒破壊光線!」

怪人が両手を前に構え、漆黒のビームをイーグルに向かって発射する。

「むっ！」

直径二メートルはあろう極太のビームは破壊力に満ちていることがありありと分かる。周囲の壁や床を削り取りながらイーグルに迫る。

「出ましたわ、あの光線を食らえばグロウイーグルであろうとひとたまりもないはず！ 今日が奴らの命日ですよ！」

上で戦況を見守っていた指揮官のスペクトラが勝利を確信しでぐつと拳を握る。

が。

「なんの！ 必殺、グロリーバースト！」

イーグルも負けじと両手を突き出してビームを放つ。それは怪人の暗黒光線とぶつかり合うと、互角の威力なのか中間で押し合う形になる。

「加勢するわ！ シャイニングレイ！」

しかし、スパローがイーグルの後ろから光線を放つと、イーグルのそれと重なり合い、威力を増して怪人の光線を飲み込んでしまう。

「な、なにに！」

そして、怪人に向かって光の奔流が迫る。

「ぐ、ぐわあああっ！」

怪人は二人のヒーローの光線を浴びて、よろよろと後ずさる。

「よし、いくぞスパロー！」

「ええ、決めましょうイーグル！」

二人のヒーローは跳び上がり、空中できりもみ回転。光のエ

ナジーを竜巻状に高める。

そして、そこから怪人に向かって飛ぶ。

「トドメだ！」

「必殺、グロリークロス！」

二人がX状に交差するように鋭いスラッシュキックを怪人に決めながら通り抜ける。

そのまま、グロウイーグルとシャインスパローは床に降り立つた。

「お、おのれ……ウギヤアアアッ！」

怪人の体の奥から光の奔流が爆発となって弾け、そして怪人は浄化されて普通の人間へと戻った。

「この世に悪がある限り、俺たちデュアルバースがお前たちを許しはしない」

「ふっ、決まったわね」

二人のヒーローが勝利のポーズを取る中、それを見下ろす指揮官ピンクヘイズは肩をすくめてみせた。

「あーん、やられちゃったねー。イーグル君、今日もつよよかったな」

「くうっ、今回の怪人のパワーならいけると思いましたのに、いまいまいしいヒーローでもすわ！」

作戦の失敗が悔しいのか、もうひとりの指揮官スペクトラがハンカチを噛んでいる。対して、隣のピンクヘイズはお気楽な笑みを浮かべているだけだった。

「どんまいだよ、次なんとかすればいいって」

「あなたねえ……いつも次、次って言いますけれど怪人もタダではないんですのよ？」

ピンクヘイズのお気楽さにスペクトラが毒気を抜かれてしまったところで、ヒーロー二人が指揮官二人のほうを向いてきた。

「この程度の怪人で俺たちを仕留めようなんて、考えが甘いぜ」
「今日こそ逃さないわよ、幹部怪人のスペクトラにピンクヘイズ！」

イーグルたちは指揮官二人を見逃さず、跳んで向かってゆく。「ふんっ、今回はあなたたちを直接相手にする気はありませんわ。わたくしは退かせていただきます。次もうまくいくとは思わないことですわ！」

スペクトラが背後の空中に開いたゲートに入って消えてしまふ。

そして、ピンクヘイズも同じようにゲートを開いたが、スペクトラよりも一瞬行動が遅かった。

「待てっ！」

そのため、イーグルの手が届くかと思われたが――

「うふふっ♪」

ピンクヘイズはイーグルに可愛らしくウインクをしてみせた。
「う……」

整った顔立ちに浮かぶ蛊惑的で柔らかな笑み。イーグルは一瞬見とれてしまった。

そして、ピンクヘイズも小さく後ろに跳んで、その場から去ってしまう。

「キミとはまた会いたいな。それじゃね、イーグル君♪」

そう言い残して、彼女は消えてしまった。イーグルの右腕は虚空を掴む。

「くっ、逃がしたか」

「幹部はなかなか捕まえられないわね。でも、今回も犠牲を出さずに怪人を退治できたし、作戦は成功よ。これでよしとしておきましょう」

シャインスパローにそう言われて、イーグルはうなずいた。

「ああ、そうだな。帰還しよう」

「ええ」

戦いは終わった。悪の組織の破壊活動を止め、市民の犠牲を出さずに済んだのだ。

今回もグロウイーグルとシャインスパローのコンビは勝利をおさめた。だが、イーグルの脳裏にはピンクヘイズの余裕に満ちた楽しい笑みが刻まれている。

「悪の組織の幹部め……恐ろしいほどの美人だが、惑わされてはいけな。次こそは逃さず、この手で倒してやるぞ」

「とか言ってるけど、あのピンクヘイズの色香にドキッとしてなかった？ イーグル、最後ちよつと動きが鈍かったし」

「な、何を言ってるんだスパロー、そんなことあるわけないじゃないか」

「ま、そういうことにしておこうかしら」

スパローの少しいたずらっぽい指摘に、イーグルはしどろもしどろになるのだった。



その日の深夜。

日本のどこかにある悪の組織デビルローゼス団のアジト、その会議室にて――

「それでは会議を始めます。司会進行は私、悪魔秘書メリナが務めます」

ダークグレーのタイトスカートスーツに身を包み、眼鏡をかけた黒髪ロングの知的な悪魔、メリナがよく通る凛とした声を会議室内に響かせる。一見すると普通のOLのように見えるが、耳が尖っていたり尻尾があったりすることで人間でないことが分かる。

彼女は理知的な顔立ちのイメージそのままに、この組織の運営面を一手に担っている幹部で、首領の側近でもある。こうした会議の場の仕切りは彼女が適任者であった。

「幹部怪人の皆さん、お集まりいただきありがとうございます。今回の議題は、最近、鳥木原地区で暴れているヒーロー、グロウイーグルとシャインスパローのコンビ――通称デュアルバーズへの対策についてです」

「怪人が撃破されること十数回。これ以上の被害は見過ごせないわ。みんな、対策を考えてくれないかしら」

メリナの言葉を受ける形で首領が声を発する。

首領・デビルローズは声からして女であることは間違いない

と思われるものの、その姿は闇に溶けていてぼんやりと上座の高い位置にシルエットが見える程度だ。怪人はおるか幹部の前にすら滅多に姿を晒さない首領であった。

メリナが首領の言葉を受けて続ける。

「というわけで今回は、現場指揮官である幹部怪人の皆さんとの会議によって、あの二人に対する作戦を決めたいと思います。では、順番に意見を聞いていききたいと思います――」

集められた四人の幹部怪人たちは、それぞれの反応をみせる。「あらあら、そんなに強い子がいるのね。もっと強い怪人をいっぱい差し向けたほうがいいのかしら？ どう思う、モニカちゃん？」

「キョーミない。わたし、自分の地区のヒーローで遊ぶの忙しいしー」

「うーん、私も担当地区だけで手一杯なのよねえ」

「エスメラルダ、モニカ、発言は挙手してからお願いします」

司会進行のメリナは眼鏡を指で微調整するような仕草をしつつ、勝手に口を開いた二人をたしなめた。叱られた二人、まるで人妻のような包容力を持つエスメラルダという女性と、生気そうな小悪魔といった雰囲気モニカの二人は、「はい」と素直に返事をする。

「とはいえ、お二人のご意見はわかりました。では次に、スペクトラ、意見を」

「はい」

スペクトラは席から立ち上がり、礼儀正しく一礼してから改

めて口を開く。お嬢様怪人スペクトラは、他の幹部怪人たちよりも上品なのである。

「わたくしとしましては、あのコンビを分断する作戦がよろしいのではないかと思いますわ。怪人を複数用意し、別々の場所で破壊活動をする。そして、あの二人が手分けしてそれぞれのポイントに到着したところで、各個撃破してはいかがでしょうか」

「ふむ……悪くない作戦ですね」

「でも、分断するまではよくても決め手がないわね。あと一押し何かがないと、各個撃破されるのは怪人のほうになってしまうのではないかしら」

首領が口にしたことはスペクトラ自身も感じていたことだったのか、難しい顔をする。

「確かに、そうかもしれないせんわね……」

それきりスペクトラが黙ってしまったところで、最後の一人が口を開いた。

「ちょっといいですかあ？」

幹部怪人の中では一番の下っ端である、ゆるふわギャル怪人ピンクヘイズは、挙手をして発言の許可を求めた。

「はい、どうぞ、ピンクヘイズ」

「みんながああ二人に対処する気がないんならあ、私が直接戦ってみたいと思うんですけどね」

「直接？ 怪人に任せるのではなく、ですか？」

「はい。私ってー、幹部って言ってもつい最近まで現場で普通

の怪人やってたんでー、戦闘にはけっこう自信あるんですよー」
「えー？ ピンクヘイズってむしろ戦闘能力はあんまし高くないほうじゃなかったっけー？」

モニカがそう疑問を口にする、ピンクヘイズはいたずらっぽい顔でダブルピースをする。

「純粋な戦闘能力ならそうなんだけども、私い、男の子相手なら絶対勝てるぐらい自信あるんだー。特にあのイーグル君みたいなタイプの子は相性バツグンっていうかー」

「ふーん。ま、そういうのはわたしも得意だけどねー」

ピンクヘイズとモニカのやりとりから、メリナは何かを考えている様子だった。

「……ふむ。ピンクヘイズ、直接戦うにしても、どういったプランがあるのですか？」

「えっとですわー——」

ピンクヘイズが作戦を説明する。

「……ってカンジで、スペクトラちゃんの作戦を一部拝借して、私なりに戦ってみようかなって思ってますー」

ピンクヘイズの説明した作戦に、会議の参加者たちは一様に納得顔を浮かべていた。その雰囲気を見て、メリナは首領に顔を向ける。

「なるほど。いかがでしょう首領、ここはピンクヘイズに任せてみては」

「そうね。確かにピンクヘイズなら適任だと思うし、面白いことになりそうだわ」

「は」

首領の許可が出て、メリナはうなずいてみせる。

「では、デュアルバーズの始末はピンクヘイズに一任することとします。他の皆さんも、それでよろしいでしょうか？」

成功すれば手柄をピンクヘイズが持つていくことになる。それを受け入れてもいいのか、メリナは他のメンバーに確認を取ったのだ。もともと他の三人はこの作戦に積極的ではなかった。が必要がなさそうではあったが、それでも一応聞くのがメリナという女の几帳面さであった。

「異議なし」

「いいんじゃないかしら」

「まあ、よろしいんじゃないですか？ お手並み拝見ですわね」

果たして他の幹部怪人たちは素直に賛成したので、方針はまとまった。側近のメリナは眼鏡のブリッジ部分を押し上げるような仕草をしつつ、首領にうやうやしく告げる。

「首領、以上のように決まりました」

首領は、闇に包まれたままで他の面々からはほとんど見えないう状態であったが、それでも威厳を放ちながら笑みを漏らす。その雰囲気は幹部怪人たちは圧倒される。

「ふふつ、幹部が直接戦うことになるだなんて、デュアルバーズがそれだけ厄介なヒーローだということね。逆に言えば、厄介な彼らを仕留めれば我が組織の活動は格段にやりやすくなるわ。頼んだわよ、ピンクヘイズちゃん」

首領がそう声をかけると、ピンクヘイズは立ち上がって両手の人差し指を自分の頬に向けるポーズをして、可愛らしく首領にウィンを向けるのだった。

「はい。私、がんばってヒーロー君たちを倒しちやいますね」
♪

会議が終わり、アジト内の通路をピンクヘイズは軽やかな足取りで歩く。隣にはスペクトラもおり、声をかけてきた。

「ピンクヘイズ、大丈夫なのかしら？ わたくしが提案した作戦を一部使うというのなら、手伝ってさしあげてもよろしくですよ？」

「んー？ 大丈夫だよー、ありがとねスペクトラちゃん」

「べつに、お礼を言われるようなことはありませんわ」

二人が並んで歩きながら会話しているところに、後ろからメリナが追いついてきた。

「ピンクヘイズ。怪人は使うのでしょうか？」

「そうですねー、スペクトラちゃんの作戦通り、二体用意してもらっていいですかあ？」

「いいでしょう。どういったタイプの怪人を？」

「えつとおー……」

ピンクヘイズが必要な怪人の特徴を告げると、メリナとスペクトラはうなずいた。

「なるほど、陽動にはびったりですね」

「ぼやぼやしてそうに見えて、なかなか考えているじゃない」

「えへへー、ありがとー♪」

明るい笑顔でダブルピースをするピンクヘイズに、スペクトラが苦笑を浮かべる。

「まったく、出撃前とは思えない緩さだけれど、それがあなたらしさなのかしらね。ま、あなたが失敗したら次はわたくしを引き受けてさしあげますわ。気楽に行ってください」

「うん、頑張るねー」

そして、ピンクヘイズはこの日の数日後、二体の怪人を連れて出撃していくのだった。

正義の味方、グロウイーグルの日常は平凡そのものだった。グロウイーグル——本名を鷺崎光一郎わさざきみついちろうというが、彼は大学生として日々を過ごしている。この日も、一日の授業が終わって午後二時半には大学を後にしていた。

「ふうっ、今日も真面目に授業に出たな！ さあて、ジム行ってトレーニングでもするか」

光一郎はジム通いが趣味だった。正義のヒーローとして活動する日々は充実しており、変身後の能力を高めるためにも体を鍛えたいと思っているのだ。

彼は身長が一七七センチあり、体重は七三キロほどである。

髪は短く狩ってスポーツ狩りにして、鍛えられた体型をした青年だ。

ジムに向かう彼のもとに、女性が歩み寄って声をかけてきた。

「こんにちは、鷺崎君。いつも元気そうね」

「お、すずめじゃないか。今日はこの辺で仕事を？」

「ええ、外回りだね」

ライトグレーのタイトスカートを身にまとった茶色いロングヘアのOLは、ふっと息をつく。

そのキリッとした涼やかな顔立ちと、すらりとした見事なスタイルの前に、光一郎は見とれてしまう。いつもパートナーとして一緒に戦っているにもかかわらず、その美人ぶりに慣れることはなかった。

彼女がシャインスパローの正体であり、本名を柏原かしわはらすずめという。

「今日もジム？ 鷺崎君、頑張ってるわね」

「ああ、やっぱり街を守るためにも少しでも強くなりたいしな」すずめとは互いに正体を知っており、近所に住んでいることもあってこうして定期的に顔を合わせている。彼女の正体が年上のOLだと知ったときは驚いたものだ。

「変身前の体力を上げておけば、変身後の力も比例して上がるんじゃないかって思うんだよな。実際どうなのかは分かんけど」

「格闘技の稽古もしてるんでしょ？ そういう努力は実戦で活きたときが必ず来るから、絶対に無駄にはならないと思うわ」

「だよな。デビルローゼス団の怪人も強くなってきたし、負けないようにパワーアップしてかないと」

「ふふつ、鷺崎君がそうやって頑張ってくれているの、頼もしいわ」

すずめが笑みを浮かべて身じろぎすると、彼女の髪——少し色素の薄い、茶色があったロングヘアからいい匂いがする。

ひいき目なしに見ても、すずめは美人だ。光一郎は彼女がパートナーでいてくれることに喜びを感じているし、これから一緒に戦い続けたいと思っている。

「よ、よしっ。じゃあ、俺はトレーニングを続けるぜ」

「ええ、頑張つて。私も仕事が終わったらちゃんとトレーニングしなきゃ」

学生の自分よりも、すずめのほうが大変な思いをしている。毎日仕事をしながら正義のヒーローとしての使命も抱えているというのは激務もいいところだ。

だからこそ、自分が頑張つてすずめの負担を減らしてやらねばと光一郎は思うのだった。

トレーニングを終えて、光一郎は夕焼け空の下、帰路についていた。

「すずめは今日も綺麗だったなあ」

大学にも可愛い子はいるのだが、その誰よりもすずめのほう

が魅力的に感じる。毎日会えるわけではないが、今日のように会えた日は大きな喜びを感じ、トレーニングにも気合が入る。

いつそ告白してしまいたいと思っているのだが、なかなかその踏ん切りはつかない。なにしろ、もし振られたらコンビとして戦う際に気まづくなってしまうそうだし、今の良好な関係が崩れるかもしれないと思うと怖くなってしまふのだ。

「ええい、デビルローゼス団相手ならいくらでも勇気が出るつてのに、色恋となるとこれだもんなあ。情けないもんだ」

とはいえ、手をこまねいていてすずめに彼氏ができてしまったりしたら、いつまでも足踏みしていたことを後悔することだろう。そんなことになるぐらいなら勇気を出すべきだ、と思う。

思っているもなかなかその一步を踏み出せないのが、現状の光一郎なのだった。相手が年上だからというのも理由としてはあるだろう、自分はまだ学生で、相手はすでに社会で立派に働いているOLなのだ。その差からくる気後れもある。

もどかしさに頭を激しく掻くと、光一郎はため息をつきつつ勢いよく立ち上がる。

「ふう、悩んでいてもしょうがないな。今は悪の組織を壊滅させることが最優先。戦いが一区切りついたら、そのときこそ告白しよう」

ひとまずそう心に決める。もはや、光一郎としてはすずめ以外の相手など考えられないのだ。今は一緒に戦えるだけでもいい。しかし、いずれはプライベートでもパートナーになりたいのだった。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか自宅近くまで来ていた。

「さて、今日もうまいもん食って英気を養って、ヒーロー活動に備え——」

そう光一郎が拳を握ったタイミングで、遠くに爆発音が聞こえた。

「うっ……花火じゃないな、これは……？」

そういう音ではなかった。光一郎は生身でも耳がいい。爆発音は低い位置から聞こえた気がした。

果たして、スマホに通知が入った。怪人出現、という速報が出ている。

「やはり！ デビルローゼス団め、今回は早いな」

前回の破壊活動から三日しか経っていない。こんなに早く何かしら襲撃してくるとは、厄介なことだが正義のヒーローとして対処せねばなるまい。

「ミューテーション・イーグル！」

光一郎はポケットから出したクリスタルを掲げて叫ぶ。すると、まばゆい光が彼の体を包み込み、全身に青を基調としたバトルスーツが装着された。

そして、頭部には顔の上半分を隠すようなヘルメットが装着されている。

「正義の戦士、グロウイーグル！ 現場に急行する！」

グロウイーグルはその場で跳び上がる。八メートル程度は跳躍しただろう。彼とパートナーのシャインスパローは、鳥をモ

チーフにした姿そのままに跳躍力や空中での戦闘能力が特徴だ。

イーグルは電柱から電柱に跳び移るようにして猛スピードで現場に向かう。その途中、通信が入った。このヘルメットには、相棒からの通信はいつでも聞けるようになっていた。そして、スパローの声がヘルメット内に響いた、

『鷲崎君、いえ、イーグル。私も現場に急行しているわ』

「スパロー、リーダーからすると敵は五丁目のあたりを襲撃しているようだ。俺が先行して戦闘状態に入る！」

『それが、私の近くの鳴坂地区でも怪人が現れているの』

「なんだって？ まさか、二箇所破壊活動しているっていうのか」

『どうやらそのようね。私は鳴坂の怪人に対処するわ。五丁目の怪人はイーグルに任せるから』

「ああ、気をつけろよ。お互い、自分のところの怪人を倒したら合流しよう」

『ええ！』

通信を切る。

「デビルローゼス団め、ゲートポイントを複数発見でもしたか」

デビルローゼス団は要人や金銭を狙ったりすることも多いが、ゲートポイントと呼ばれる場所を爆破する作戦をよく実行する。そのために市民に犠牲が出たり多大な被害が出るのだが、イーグルたちはそれを阻止するために出動することが多々あった。

「とにかく、さっさと怪人を倒してスパローと合流せねば！」

現場に急行するイーグル。そして、現場は片側一車線の古い

商店街であった。その通りの中心で、拳で道路を殴って陥没させている怪人がいる。その周囲には戦闘員もおり、集団で破壊活動をしているようだ。

「やめろ、デビルローゼス団め！」

「ム？」

イーグルが上から声を飛ばすと、怪人が頭を上げる。

巨大な亀が直立したようなシルエットの怪人だ。色は茶色がかっている。

「正義の味方、グロウイーグル参上！ 破壊行為はそこまでだ！」

「こしやくな、グロウイーグル！ 我らの作戦のじゃまをするか！ 戦闘員ども、まずはお前たちがゆけい！」

「はっ！」

女戦闘員たちがイーグルの前に立ちふさがった。

どうやら、ここにいる戦闘員はすべて女性のようなのだ。みな、髪型は違うものの様に黒髪で、黒のレオタードを身にまとって黒のゴーグルで目を隠している。ボディライン丸出しの格好だが、みなスタイルはかなりよく、美人揃いであろうことがうかがえる。

もちろん、女が相手だからといって攻撃できないようなグロウイーグルではなかった。

「今日は時間をかけている暇はない、悪いが容赦はしないぞ！ はあっ！」

イーグルは戦闘員たちの中に身を躍らせると、回転蹴りで数

人をなぎ倒す。

「きゃあっ！」

「あぐっ！」

そして、さらに光のエナジーを集中させて球状にし、それを戦闘員たちに向けて放った。

「いけっ、イーグルフォトン！」

光弾が飛び、戦闘員たちの中央で炸裂。

「うわあああっ！」

それで何人かが吹っ飛び、残りも腰が引けた様子になる。

「だ、ダメだ、我々では歯が立たない！」

女戦闘員たちは、すぐに戦意を失ってしまったようだ。

それを見ていた怪人は、笑みを漏らしたようだった。

「ほう、なるほど、たいした破壊力だ。聞いていた通りだな」

怪人が前に進み出してくる。それと同時に、倒れた戦闘員たちはよろよろと起き上がると、怪人の後ろに下がってゆく。

「戦闘員では時間稼ぎの役にも立たんとは、やはりこの俺様がやるしかないようだな。お前たちは退却して上に報告でもしておけい」

「お、お願いいたします」

怪人に場を預け、女戦闘員たちは撤退していった。

「さて、きさまがグロウイーグルか。俺様は怪人イービルタートル！ きさまの攻撃はすべてこの俺が跳ね返してくれるわっ！」

「タフそうな怪人だな……いいだろう、受けて立ってやる！ いくぞイービルタートル！」

イーグルは着地し、怪人と向かい合う。亀とはいえ、手足は普通に人間のような長さだ。

「イーグルチャージ！」

イーグルは突進してタックルを仕掛ける。

「ふん！」

イービルタートルは背中の中羅を向け、タックルを防いだ。

「ぬるいわ！」

「ぐっ、なんという硬さだ。しかし、それなら！」

イーグルは空中に跳び、飛び道具を放つ。

「くらえ、怪人！」

エナジーで作った光球を投げつける。女戦闘員たちを一撃で戦闘不能に追い込んだ高威力のエネルギー弾だが――

「甘い甘い！」

しかし、それも亀の甲羅で防がれてしまい、弾き飛ばされて空に消えていってしまった。見た目通り、守備に優れた怪人であることは間違いないようだ。

こういう怪人と戦った経験はあるが、例外なく長期戦になった。

「スパローを助けに行きたいのに、こんな怪人が相手では……いや、それでもできるだけ早く倒すんだ」

イーグルは着地し、怪人の隙をうかがう。

あまりにも相手に対して集中していたため、イーグルは、この戦いを見ている通行人がいることに気づかなかった。

「す、すごい、ヒーローと怪人だ。やべえな、スマホで実況すつ

か」

「やばいって、逃げようよ」

若いカップルだった。声が聞こえてイーグルもさすがに気づく。

「危ないぞ、逃げろ！」

「ぼやぼやしていると通行人が危ないぞ、そおら！」

イービルタートルが岩を歩道に向かって投げつける。

「くっ！」

イーグルはとつさにカップルの前に立ちほだかり、岩を蹴り上げて弾く。大人の腕の長さほどの直径のある大岩だったが、砕け散ってしまった。

「大丈夫か！ 早く逃げるんだ」

「ほら、行こうよ！」

「お、お……」

腰を抜かしかけていた男のほうを、女が引つ張って逃げている。

これで、どうやら周囲に一般人はいなくなった。遠巻きに見ている者はいるようだが……

「念のため。結界展開！」

イーグルは、怪人と自分を中心に半径二百メートルほどの空間に結界を展開した。

これで、一般人は近くに寄ってこれられない。

「ふっ、結界のためにエナジーを消耗してくれるとは、ありがたいことだわい」

「この程度のことと俺の勝利は揺るがない。いくぞイービルタートル！」

「ほざけ！」

怪人は陥没させたアスファルトを拾い上げ、次々と投げつけてきた。しかし、イーグルはそれらを最小限の動きでかわしてしまおうと、怪人に向かって鋭く踏み込んで距離を詰める。

怪人からはまるで瞬間移動しているように見えたであろう。

「なっ、なにっ！　なんとというスピード——」

「くらえ！」

イーグルは正面からイービルタートルへと迫る。

「ぬっ、だがこの完璧なガードで——」

イービルタートルが背中の中羅を向ける。が、イーグルはタートルの間近まで迫ると、急旋回して相手の背後にまわった。

「なっ！」

「必殺、イーグルキック！」

そして、イーグルのキックが一閃。

「ぐはあっ！」

イービルタートルは吹き飛んで地面に二回バウンドし、倒れる。

「ぬううっ、さすがグロウイーグル、組織を苦しめているだけはある……」

「まだまだいくぞ！」

そして、そこからはイーグルのペースで戦いは進む。だが、イービルタートルも何度攻撃を食らっても立ち上がってきたの

で、イーグルも簡単に勝つとはいかなかった。

が、ついにイーグルの必殺技が怪人をとらえた。

「いけっ、イーグルフォトン！」

「ぐわーっ！」

ダメージが蓄積して動きの鈍ったイービルタートルは、ついにイーグルフォトンで無防備で食らい、その場に倒れた。

怪人が倒れたまま立ち上がれず、完全に力尽きたのを確認し、グロウイーグルはガッツポーズをする。

「ふうっ、本当にタフな怪人だったけど……俺の勝ちだ！　攻撃能力に欠けていたことが災いしたな」

「ぬっ、ぐぐ……おのれ……」

イービルタートルは口惜しげであったが、しかし、口元に薄く笑みを浮かべる。不敵な笑みであった。

「ククッ……さすがの強さだったが……しかし残念だったな、俺様はすでに役目を果たしているのだ。今頃、お前のパートナー

はあの方の手に……ぐふっ」

「な、なにっ！」

怪人はそれで気を失うと、禍々しいダークエナジーが体から抜けてゆき、徐々に変身が解けて中年男性の姿となった。作業服を着た普通の男性だ。

死んではいないだろうし、怪人化を引き起こしていた魔核をイーグルフォトンで破壊したので再怪人化もあるまい。あとはヒーロー支援組織に任せれば、この男性を回収してくれるだろう。

これで怪人の無力化は成功したが、しかし怪人が最後に言ったことにイーグルは焦る。

「くっ、まさか、こいつは陽動か。狙いは俺たちを分断することか……？」

イーグルはその場で大ジャンプし、家々の屋根を足場に跳んでスパローが戦っている地点へと猛スピードで向かう。

目的が破壊活動そのものではなく、自分たちデュアルバーズを狙ってのものだとするなら。

「だとすればスパローが危ない。スパロー、聞こえるか！」

通信で呼びかけるが、返事はない。戦闘状態に入っていて結界が張られているのだろうか。結界があると通信は届かなくなってしまう。

「くっ、すぐに助けにいかねば！ 持ちこたえていくれよ、スパロー！」

怪人の口ぶりであれば、こちらは時間稼ぎでスパローのほうが本命なのではないか。イーグルが倒したもののよりも強力な怪人が配備されているのかもしれない。イーグルは危機感に突き動かされ、スパローの元へと急いだ。

少し時間は戻り——シャインスパローが相手取った怪人は、多角的な飛び道具とする個体だった。

「ワハハハッ！ この俺の七色のビームの前では、いかなシャ

インスパローといえど近づけまい！」

全身に砲身を生やしたような異形の怪人は、空中のスパローに対して次々とビームを発射してくる。

「このっ、鬱陶しいわね！」

スパローは空中の機動性だけでなくイーグルよりも優れている。小回りのきいた動きでビームを危なげなく避けているが、攻撃に移るのも難しい状況だった。

なにしろ、地上にいる怪人に攻撃を仕掛けるために近づけば被弾の危険が高まるし、地上に降りて攻撃を仕掛けようとするばビームが水平発射されることになり、周囲の建物や人に被害が出る恐れがある。もちろん結界は展開してあるのだが、結界内に被害が出ることは当然ながら防げないのだ。

「時間をかけるのは避けたいの……」

イーグルのほうはどうなっているか分からないが、もし向こうに怪人が何体も配備されていたり厄介な状況になっていたらまずい。スパローとしては、この怪人を早めに倒してイーグルと合流したかった。

「出し惜しみは無しね！ フェザーフラッシュュ！」

スパローがエナジーを背中の翼に集中させ、光り輝く羽を多数、飛び道具として怪人に発射する。

「ぐっ、ぐわっ！」

怪人はフェザーを食らってよろめく。だが、致命傷にはならないようだ。ダメージは多少あったようだがピンピンしている。「おのれっ！」

怪人はビームをまとめて発射してくるが、スパローはそれを空中で巧みに避けると、フェザーを発射しながら怪人に向かって飛ぶ。

「そこっ!」

スパローの発射したフェザーが怪人の肩口に刺さり、体勢を崩す。

「うぐっ!」

「スパローキック!」

シャインスパローの急降下キックが怪人に直撃!

「ぐわーっ!」

怪人は、猛スピードのスパローの蹴りを食らって吹っ飛んだ。そこに、スパローは地面を蹴って体勢を立て直しながら必殺技を放つ。

「トドメよ! シャイニングトルネード!」

スパローの両手から光の渦が怪人に向かって迫り、そして飲み込んでしまう。

「うぐわーっ!」

スパローの光のエナジーが怪人を浄化し、そして人間に戻してゆく。光の渦が消えたあとには、二十代後半ぐらいの痩せた男がその場に膝をついていた。

「む、無念……」

怪人が倒れると、スパローは大きく息をついた。

「さすがに、早く倒そうと思ったら切り札を使わざるを得なかったわね……とにかく、早くイーグルと合流し……」

スパローはやや疲労した様子を見せながらも、顔を上げてイーグルのいるはずのほうへと向かおうとする。

「はっ!」

間一髪、スパローは振り下ろされた一撃を避けた。一瞬前まで立っていたアスファルトの地面にクレーター状のヒビが入る。

「あ、避けられちゃったー!」

そこにいたのは、露出度の高い格好をしたグラマーな女だった。スパローとは対象的な、漆黒のコウモリ羽を背中に生やした美女――

「あなた、幹部のピンクヘイズ!」

「こんばんわー!」 ひとりでも怪人を倒しちゃうなんて、さすが正義の味方だねー!」

「あなたが直接私を狙ってくるだなんて、珍しいこともあるじゃない。ここで会ったが百年目、私が倒してあげるわ!」

りりしい表情で相手を指さすスパロー。しかしピンクヘイズは余裕を崩さず、手の甲を口元に当てて薄く笑う。

「ふふっ、でも必殺技で怪人を倒しちゃったから、今のスパローちゃんにはあんまり力が残ってないよねー? 私、分かっているだから」

「くっ……」

「じゃ、バトルしちやおっか? イーグル君が来る前に、ね」

「あれはスパローのシャイニングトルネード？ 決め技を放つとは、手強い怪人と戦っているのか」

イーグルがスパローの技の光を視認したとき、まだ現場までそれなりの距離があった。

そして、十分後に到着すると、そこには幹部怪人のピンクヘイズの姿と、彼女の肩に担がれて気を失っているシャインスパローの姿があった。

「スパロー！ くっ、ピンクヘイズ、まさかお前がスパローをやったのか」

幹部が直接スパローを襲うとは、今までになかったことだ。

「イーグル君、早かったねー。あの怪人をこんなに早く倒してくるなんて、さっすがあ。時間稼ぎ用にめちゃくちゃタフなを送り込んでおいたのにな」

「これがお前の狙いか。スパローをどうするつもりだ！」

「うふふ、ちょっとね。心配しなくてもスパローちゃんは傷つけるつもりはなくて、この子は私があなたと一対一で戦うために役立ってもらうんだ」

「なにっ」

「キミたちってえ、いつもコンビで動いてるじゃない？ でもお、怪人は役に立たないしい、私ひとりであなたたちを両方相手にするのは大変だからあ、イーグル君と一対一でやりたいって思っってえ、それで今回はスパローちゃんだけ先に捕まえたのー」

ピンクヘイズのふわふわした喋り方にイライラしつつ、イーグルは言い返す。

「ええい、タイマンで戦いたいっていうんなら相手になってやる。この場でスパローを解放して俺と戦え！」

「うーん、でもお、それだとスパローちゃんが目を覚ましたら絶対イーグル君に加勢するじゃない？ それだとメンドーだし。邪魔が絶対入らないようにして戦わせてもらうねー」

そして、ピンクヘイズは小さく笑みを浮かべ、イーグルに向かって大きな胸を強調するような前傾ポーズを取ってみせた。

くつきりと浮かんでいる大きなおっぱいの谷間を見せつけられ、イーグルはついそれに目を奪われてしまう。

「イーグル君には、私が指定した場所に来てもらうね」

「指定した場所……それはどこだ」

「あとで連絡するから焦らないの。ふふっ、じゃあねー、スパローちゃんは大切に扱っておくから、心配しないでねー」

「ま、待てっ！」

スパローの安全を思うと下手に手出しができなかったが、手をこまねいている間に瞬間移動ゲートが開いてしまった。

しかし、まだ間に合う。

「逃がすかつ！」

イーグルはピンクヘイズに向かって突進しようとする。

「うふふ……♪」

が、そこでピンクヘイズは指先で自分のタイトスカートの裾をつまみ、小さくめくり上げてみせた。すると、ピンクヘイズ

のスカートの下の白い下着がちらりと見える。

「う……！」

むっちりした太ももと、下着に包まれた鼠径部が見えて、イーグルはどきりとしてしまう。こんなときだが、彼は女性との交際経験などなく、こういうことに免疫のない青年なのだ。

「あはっ、逃げる余裕くれてありがとー、純情だねイーグル君♪
じゃあねー♪」

「うっ、し、しまった！」

パンツを見せつけられて動揺している間に、ゲートの向こうにピンクヘイズが消えてしまう。イーグルは急いで飛びかかったが、手が届く前に、スパローを抱えたピンクヘイズは消えてしまった。

「くっ、くそっ！ 俺としたことが、色香に惑わされるとは」

ピンクヘイズは確かに美人だが、悪の組織の女怪人である。

そんな相手の下着に釣られて隙を作ってしまったことは口惜しかった。

「しかしピンクヘイズめ……スパローを捕まえるとは。あいつが直接手を出してくるのは予想外だった」

いつも怪人を倒すとさっさと逃げてしまう幹部怪人たち。仕留めようと思っても手が届かなかった。

だが、今回は怪人を陽動や囮のような使い方をして、ピンクヘイズが直接手を下してきた。今までになかったパターンであったため、イーグルもスパローも翻弄されてしまったといえる。

「だが、幹部怪人が出てこざるをえないぐらい俺たちがデビル

ローゼス団を追い詰めているということなのかもしれない。こうなったら、この機会に必ずあのピンクヘイズを仕留めてみせるぞ。待っていてくれ、スパロー」

とにかくスパローのことが気がかりだ。ピンクヘイズは連絡すると言っていたが信用できるわけがない。イーグルは、これから必死の捜索に出るつもりだった。

しかし、手がかりは得られず、それから二日後。

本当にピンクヘイズから連絡が入った。おそらくピンクヘイズのスマホをハッキングでもしたのか、イーグルのスマホにメッセージが来たのだ。

『はあい、イーグル君♪ 約束通り、場所を教えるねー』

ピンクヘイズが指定してきたのは、街から離れた山中の石切り場跡であった。

「くっ、本当にスパローは無事なんだろうな」

イーグルを焦りを抑えきれず、しかし確実にピンクヘイズを勝つためにもコンディションはしっかり整え、万全の状態で見地へと向かった。

そして、どういう状況になるか分からないため、万が一を考えてとある道具を用意した。リターンウイングというもので、使うと安全なところまで瞬間移動できるといふものだ。

先輩のヒーローにもらった、一度きりの使い捨てとなる貴重

な道具だ。

「状況によつてはスパローを助けたら逃げるべきだ。飛んで逃げることもすら許されないようなピンチなら、これの世話になるしかないだろうな」

そして、はやる気持ちを押さえながらも街の北側の山中にある石切り場跡に到着。イーグルの飛行能力にかかれば到着はすぐであった。

石切り場跡は岩山に囲まれた広い平地といった具合だ。その広場の中央にイーグルは降り立った。

「スパロー！」

果たして、シャインスパローは石切り場の高い岩場で、十字架に磔にされていた。気を失っているようだが、胸が上下していて命はあるようだった。

そのすぐそばに、ピンクヘイズがいた。彼女はイーグルに向かって手を振ってくる。

「はあい、イーグル君。ちゃんと来てくれて嬉しいわ」

「ピンクヘイズ、貴様！」

ピンクヘイズは小さくジャンプし、イーグルのいる広場に降りてくる。

「ちゃんとスパローちゃんは無事だから安心してね。今は寝ているだけだから」

「くっ、いずれにしてもお前を倒して、すぐに助け出してやる」

ピンクヘイズは、しなを作るようにしながら体を見せつけるポーズを取る。

「改めて自己紹介するねっ。私はデビルローゼス団の女怪人、ピンクヘイズだよ。よろしくねー♪」

「俺は正義のヒーロー・グロウイーグル！ 直接やり合うのは初めてだな、ピンクヘイズ。今回のやり方、どういう風の吹き回しだ？」

「ふふっ……」

ピンクヘイズは、薄いピンク色をしたロングヘアをかき上げる仕草をした。可憐な見た目をしているだけに、そんな女性的な仕草にイーグルはつい目を奪われてしまう。

「うっ、可愛いなんて思っているのはダメだ。相手は悪の組織の女怪人だぞ」

そう思い直すが、見た目が美女であることは間違いないため、イーグルはどうしても意識せずにはいられない。

胸元やお腹が素肌丸出しで、下半身もタイトミニスカートの分、太ももがむき出しだ。肌の露出が多くてボディラインの分、かりやすい格好であり、あまりにも女性の魅力に満ちた柔らかそうな肢体は、イーグルの男としての興味をどうしてもなく引く。

背中のコウモリのような黒い羽が怪人であることを示しているものの、それがなければ普通の人間と変わらないような見た目だった。

「いつも怪人と戦つてるところを見て、キミと一対一でやってみたいと思つていたんだよねえ。どんな男の子なのか、つてね。だから今回はスパローちゃんを捕まえてキミを呼び出し

たってわけなんだー」

そして、ピンクヘイズはイーグルの後ろを確認するような様子を見せた。

「ほかの仲間を連れてきたりはしなかったんだあ、感心感心♪」

「そっこそ、怪人や戦闘員はいないようだな」

人質を取られて一人で来るように命令された時点で、多勢に無勢の状況を作られることは覚悟していたので、イーグルは意外だった。悪の組織は手段を選ばないはずなのだが。

「ま、キミには並の怪人じゃ太刀打ちできないみたいだし、貴重な怪人を無駄にするわけにもいかないしー。で、怪人が通うしないんだったら幹部の私が直接出ないとじゃない？」

どうやら、本当にピンクヘイズが直接戦うようだ。他の怪人や戦闘員の気配はない。この石切り場には隠れるような場所もないので、伏兵などもないようだった。

もちろん、完全に信用はできないので油断するつもりはなかったが、これならピンクヘイズを倒すことさえできればスパローを助けられる。どうやら、持ってきたアイテムの世話にはならずに済むかもしれない。

「なるほど。お前が戦わねばならないということは、悪の組織も追い詰められているようだな」

「どうかなく？ ふふっ、それじゃ暗黒結界、展開く♪」

ピンクヘイズを中心として、ダークエナジーが放出される。そして、ドーム状の結界ができあがった。

「結界か……念入りだな」

「まあねえ、こんなところに誰が来るとも思えないけどお、それでも邪魔が入る可能性は排除しておきたいしー。これで、決着がつくまではイーグル君と私の二人きりだねー」

そう言いつつ、ピンクヘイズは背後をちらりと見る。その視線の先には磔にされたスパローの姿。

「ふふっ、まあ、あの子もいるけどねー。大切なスパローちゃんを助けたかったら、頑張って私を倒さないとだよね？」

「言われるまでもない。必ずお前を倒してシャインスパローを取り戻してやる」

ピンクヘイズはイーグルに向き直ると、楽しみにウィンクをしてみせた。

「そうこなくっちゃ、楽しいバトルになりそうく♪」

こうして、グロウイーグルとピンクヘイズの勝負が始まったのだった。

第一章 ゆるふわギャル怪人の誘惑

イーグルはピンクヘイズを見据え、構えを取る。

ピンクヘイズは特に何もせず、武器などを取り出す様子はない。徒手空拳で戦うタイプだろうか。

ただ立っているだけで構えなどもなく、戦意が感じられないのが逆に不気味ではあったが——ここは先手必勝、イーグルは地面を蹴ってまっすぐに突っ込んだ。

「いくぞ、ピンクヘイズ！」

イーグルがパンチやキックを繰り出しゆく。ピンクヘイズは笑みをたたえたまま、それをかわす。

イーグルもまずは小手調べという具合に、相手の实力を探るために慎重に仕掛けたとはいえ、それでも相手の身のこなしはなかなかのものに見える。スパローがやられてしまった相手なのだから当然だが、容易に勝てる相手ではないと感じた。

「とりゃあっ！」

イーグルが踏み込んで横蹴りを放つと、ピンクヘイズは後ろに宙返りして避け、着地してまっすぐキックを放ってくる。

「えいっ！」

「むっ！」

ピンクヘイズの中段蹴りをガードするイーグル。鋭いが、しかし重さはさほどではない。

しかし、ピンクヘイズのタイトスカートの丈がやたらと短い

ため、さほど高くない位置への蹴りでもパンツが見えてしまいうので、それが気になる。

「くっ、怪人の色香になど惑わされてはいけない」

そう思いつつ、イーグルはパンチを繰り出そうとする。

が、ピンクヘイズが掴みかかってきているのが見えたため、とつさにその手を掴んで止めた。さらに、反対側の手も同様になり、互いに掴み合うこととなった。

がつしりと互いの手同士を掴み合って力比べの形になる。ピンクヘイズの手指の感触は繊細で柔らかく、普通の女性と同じように感じた。

「女の子と力比べしちゃうの？ 手加減してほしいな」

かなり近距離でピンクヘイズの端正な顔を見ることになるが、イーグルとしては目をそらすわけにはいかないし、もちろん手加減などできるわけがない。

「悪いが、女だからとか考えている余裕はないな！」

イーグルが力を込めると、ピンクヘイズも強く握って押し返してくる。

「ふふっ、負けないよー？」

女とはいえ怪人である、一般人の女性に比べれば当然はるかに力は強い。

「むううっ！」

全力で力を入れ、体の奥底から光のエナジを湧き上がらせるようにしてイーグルはピンクヘイズを押し込む。

「わわっ、い、いたたたっ！」

ピンクヘイズがイーグルのパワーに耐えかねて膝を折ってしまふ。イーグルが上から覆いかぶさるような体勢になり、このままいけば押し倒せるような勢いになったが——ピンクヘイズはそこで低い蹴りを打ってきた。

「もー、痛いじゃん！」

「むっ」

それと同時にピンクヘイズが手を離して飛び退くが、イーグルは当然それを追撃する。

パワーでは圧倒できる力関係だと分かったのは大きい。となれば、イーグルとしてはガンガン攻めていけばよいのだ。

「やつぱりパワーじゃ男の子にはかなわないかー。でも、戦いようはあるんだけどね」

そう言っ、ピンクヘイズは後ろに跳んでイーグルの追撃をかわすと、反撃に出てきた。

「えいつ！」

ピンクヘイズが反撃のハイキックを繰り出してくる。イーグルの目の前で、真上に打ち抜くような蹴りだ。股関節がかなり柔らかいのだろう、ここまで鋭い角度の蹴りを出せるとは。

そして——

「うっ……！」

イーグルからは白いパンツが丸見えだった。短いタイトスカートのめくれ上がつて、下着が完全に見えている。むっちりとした柔らかかそうな太ももがむき出しになり、その肉感にも目を奪われる。

「てやつ」

気の抜ける気合の声とともに、今度は後ろ蹴りを繰り出してくる。

「くっ！」

蹴り自体は猛スピードであり、やはり身体能力は怪人レベルのものがある。

そして、後ろ蹴りということは当然、こちらに向かつて今度はお尻が丸出しになっているわけで、女性らしい丸みのある尻が下着に包まれているのがよく見えてしまっている。

「う、くそっ、いちいちエロい……！」

ピンクヘイズの髪が舞い上がるといっち甘い甘い香りがするものもあって、気をぬけばすぐに勃起してしまいそうだ。

もともと、妖艶かつあどけなさもある美女であり、イーグルとしては非常に戦いづらい。攻撃するにしても、どこを狙えばいいのか分からなくなる。

パンチラキックで硬直したのをきっかけに、イーグルは完全に勢いを失ってしまった。

「どうしたのかなあ？ 攻撃してこなくなっちゃったけど、このままだと私が勝ちちゃうかも」

そうだ、攻撃しなければ勝てない。相手が女であろうと、倒さねばスパローを救い出せないのだ。

イーグルは、とにかく攻めねばと思って前に出る。

「うおおっ！」

地面を蹴り、猛スピードでピンクヘイズに迫る。直線的な突



進力は、イーグルの最も優れた部分である。

「あ、はやーい」

ピンクヘイズはまだ余裕を崩さないが、近づいてしまえばイーグルにとっては与しやすい。

「せいっ!」

鋭くキックを放つと、ピンクヘイズの脚に当たる。返ってくる感触は柔らかいが、体幹を崩せたほどではなかった。

女の体のどこを攻撃すればいいのか、一瞬の迷いがあつたため、充分に力が乗らなかったのだ。

「きゃっ、いた〜い!」

それでも蹴りが直撃したことで、彼女はさすがに表情をしかめて痛がる。だが、それでも完全には笑みを消さない。

まずはこの余裕を消すことができれば、精神的に優位に立てないような気がイーグルはした。

「おりゃああつ! イーグルファンゲ!」

イーグルは、ピンクヘイズの側面に回り込みながら彼女の背中を刈り取るかのような鋭い回転蹴りを繰り返す。

「ひゃっ」

ピンクヘイズはそれをかがんでかわす。

「もー、ちよっとしつこいんじゃない?」

そして、バク転してから地面を蹴ってジャンプし、空中で両腕を前に突き出して、手のひらを重ねて相手に向けた構えを取る。

「ピンクショック・ウェーブ!」

ピンクヘイズの手のひらからエネルギー波が発射され、イーグルを襲う。

「飛び道具か」

ピンク色のエネルギー波が迫る。イーグルはかわそうかと思つたが、その威力を目視で見破り、右腕に光のエナジーでシールドを張ってガードした。

「この程度なら!」

そして、ピンクショックウェーブはイーグルのシールドに弾かれて消えてしまう。

「えー、簡単に防がれちゃった、マジ?」

「今度はこつちだ、イーグルフォトン!」

イーグルは光球を空中のピンクヘイズめがけて撃ち出す。

「きゃ、あぶない!」

ピンクヘイズはそれをかわすと、そのまま地上へと着地した。イーグルとピンクヘイズは互いに飛び退いて距離を取る。イーグルは油断無く構え直し、一方のピンクヘイズは長い髪をかき上げて整える仕草をし、お互いに相手を見据える。

「まったく、やりづらいつたらないぜ。だが、スパローを助け出すためにはなんとしても倒さねば……」

「ふうっ」

攻防がいったん膠着化したところで、ピンクヘイズが息をつく。イーグルとしても、いったん落ち着くことができるならありがたかった。距離を取り、警戒を怠らないようにしながらピンクヘイズを見据える。

「あはっ、やつぱり思った通り、イーグル君と遊ぶのは楽しいなー♪ キミと一対一で会うためにスパローちゃんを苦勞して捕まえた甲斐があったって感じ」

「なぜ、そんなに俺と一対一で戦うことにこだわる……？」

「いつも怪人と戦つてるところを見て、キミとじっくりやつてみたいって思つてたんだよねー。どんな男の子なのかな、つてね」

自分が目当てだと知つて、イーグルはある意味では安堵していた。相手はスパローを目的として彼女を捕らえたわけではなく、イーグルをこうしておびき出すための囷として利用しているだけということになる。そのためか、見たところスパローは改造や洗脳をされているわけではなさそうだ。

つまり、自分がこのピンクヘイズに勝ちさえすれば無事に助け出すことができる。

「光栄だ、と言つておくべきかな。どうして俺にそんなに興味を持つているのかは不思議だが」

「あれだけ組織を苦しめているヒーローなんだから、興味出ちゃうって。自分の手で直接いろいろしてあげたくなっちゃう♪ 遊んであげたらどんな反応をするのか、つてね」

そう言つて、小さく舌を出してみせるピンクヘイズ。その目からは男を弄ぶことを楽しんでいる様子がありありとうかがえる。

「キミからは、今までやつつけてきたヒーローとは一味違いそんな予感があったの。たっぷり楽しませてもらうね」

その言葉で、イーグルはハッとする。

「そうか、噂に聞いたことがあるぞ」

「ん、なにかなあ？」

「ここ最近、ヒーローが負けてしまった事件がいくつかあつて、ジャスティスグレイというヒーローが黒ギャル怪人にやられた件と、他にも三人のヒーローが女怪人に負けて消息不明になったという件があつた……まさか、後者の件はお前がやったものが混じつているのか」

この怪人は黒ギャルではないのでジャスティスグレイの件とは関係がないだろうが、残る三人はピンクヘイズの仕業であるのかもしれない。

そう言われて、ピンクヘイズはあっさりと肯定した。

「うふふ、そうそう。それ、黒ギャルちゃん以外の件は全部私の仕業なんだよねー♪ その頃はゆるふわギャル怪人ってだけ呼ばれてて、ヒーローを三人討伐したら首領にめっちゃ褒められちゃつて、幹部怪人にしてもらつちやつたんだ」

「ぬうっ、ヒーローたちの仇だったとは」

「ピンクヘイズっていう名前は、昇格したときにもらったんだよねー」

ヒーローを討伐した功績で怪人が出世し、幹部になったというとか。いわば現場の叩き上げというわけだ。となれば当然、普通の怪人よりはかなり上の實力を持っていると見なければならぬ。

「これは、思つた以上に手ごわそうだな」

とはいえ、ここまでの攻防を思い出す限り、ピンクヘイズの手応えは今まで相手をしてきた普通の怪人の域を出ない。先ほどの飛び道具の威力もたいしたことがなかった。

だが、それで幹部に出世するわけがない。まだ実力を隠している可能性が高いとイーグルは踏んでいる。

「ヒーローを三人も倒している奴だ、きつと厄介な特殊能力を持っているはず。どんな能力なのか……」

それを見極めなければ、軽々しく決めにはいけません。スパローの命がかかっている中、相手の罠にはまるわけにはいかない。

警戒を強めるイーグルは、じりじりと間合いをはかる。ピンクヘイズは自然体で立っているだけだ。

岩場に風が吹き、ピンクヘイズの柔らかなロングヘアを揺らす。髪を手で押さえながら、彼女は再び声をかけてきた。

「ところで、せっかく戦闘が落ち着いたことだし、もうちょっとお喋りしてみない？ 私からイーグル君に、ひとつ提案があるんだけどなー」

「なに？」

てっきり戦闘が再開すると思っていたイーグルは、ピンクヘイズの態度に不意を突かれる。

「提案とはなんだ」

「戦わずにスパローちゃんを助ける方法があるんだけどー、お話だけでも聞いてほしいなあって」

「戦わずに、だと……？」

「もちろんタダで返してあげるわけにはいかないんだけどお、

条件次第ではオッケーっていうかー」

「むう……いったいどんな条件だ？」

イーグルとしては、悪の組織の女怪人と交渉すること自体、抵抗があった。どうせ無理な条件をつけてくるだろうとは思えない。

それでも、もし安全にスパローが戻ってくる道があるのなら……そう思って、イーグルは警戒しながらもピンクヘイズの話を聞く。

「それはねえ、私の仲間になってくれたら、っていう条件なんだよねえ」

「仲間……まあ、そんなところだろうとは思ったが……」
「うふふ、イーグル君はそんな条件は飲めない、って答えるよねえ？」

「当然だ。悪の組織の仲間になどなるわけがない。俺は正義の味方だからな」

半ば予測していた条件だったので、イーグルに動揺はなかった。

「まあ、確かにこの条件だと降参するようなものだし、イーグル君に受け入れてもらうのは無理かなーって私も思ってたの。でも、こういう風にしたらどうかなあ？」

ピンクヘイズは、無造作にイーグルに近づいてくる。

「うっ、なんだ……？」

戦意を感じなかったのので特に手出しもせず、イーグルはピンクヘイズの接近を許してしまった。

近くで見ると、その柔らかな印象を受ける顔立ちにドキドキさせられてしまう。色気とあどけなさをバランスよく感じられるような、イーグルにとって好みの美人だった。

「うふふ、私、知ってるのよ？ イーグル君っていつも、私のばんつとかおっぱいを見てたでしょう」

「そ、そんなことはない！」

強弁するものの、実際のところはピンクヘイズの女性的な丸みのある肢体にはいつも思わず視線を奪われてはいた。パンツに動揺して、逃げるピンクヘイズを捕まえられなかったのも最近のことだ。

「どう？ 私の言うことを聞いてくれればあ、おっぱいをもみもみしたり、もつとえっちなことをさせてあげてもいいんだよお？」

「な、なに……？」

ピンクヘイズはイーグルのすぐ前、一メートルもないくらいに近づいてくると、両手で自分のおっぱいを持ち上げるようにして揺らしてみせる。その柔らかそうな肉感を前に、イーグルはついおっぱいを見つめ、ごくりと唾を飲み込んでしまう。

「お、大きい……近くで見ると、なんて柔らかそうで大きなおっぱいなんだ……」

ついさっきまでは敵の誘いなど言語道断、と思っていたイーグルだったが——このおっぱいを前にすると、完全に突っぱねてしまうのもどうか？ という思いが浮かんてくる。仲間になつたふりをしてスパローをかつさう、という手もあるではない

か。

そんな彼の思考を読んだかのように、ピンクヘイズは続ける。「戦つたらお互い、痛い思いをしちゃうんじゃない？ それよりは仲良くなったほうがいいと思うんだよねー」

「な、仲良くなりたければ、街での破壊活動をやめるんだ。それなら俺だって戦う理由などないんだし……」

「んー、それはできないかなー。私にも目的があるしい」

「それなら平行線ってことになってしまふぞ。ピンクヘイズ、悪いことは言わないから組織を抜けるんだ」

イーグルはピンクヘイズを説得にかかった。戦わずに済むならそれに越したことはない。こんなエッチな女性に対して暴力を振るうのには抵抗がある、という理由もあるが。

すると、ピンクヘイズはさらに提案をしてきた。

「組織は抜けないけどお……それじゃ、こういうのはどうかな？ 私ねー、えっちなことが大好きなんだよねー。イーグル君ってけっこうイケメンだし、私といろいろイイコトしてみない？」

「え、えっ」

イーグルは動揺してしまった。

「い、イイコトって……」

ピンクヘイズの大きくて扇情的な丸みのあるおっぱい、あどけなさを残した色っぽい顔立ち、そして濡れた唇。そんな彼女の女性的魅力を目の前にして、イーグルはごくりと唾を飲む。

正義のヒーローとして、悪の組織の女怪人の色香に魅力を感じ

じてしまっているのはまずい、とイーグルの中にある使命感が警鐘を鳴らすのだが、人気がない場所ということもあって、男としての反応を見せてしまっていた。あまりにもピンクヘイズの肢体や顔は魅力的すぎて、気を抜けば勃起してしまいそうだ。「えっちなことをして楽しくなって、仲良くなっちゃおうよ。そうだ、もうひとつスパローちゃんを解放する条件を追加しちゃうね。私とえっちしていっぱい楽しませてくれたら、返してあげてもいいよ?」

「そ、それは……」

まさか、こんなことを敵が言い出すとはイーグルは思ってもみなかった。

ピンクヘイズはおっぱいを支えるようにして腕組みをして、胸を強調してみせる。そうすると、ボリュームのあるおっぱいがイーグルの目の前に押し出されてくる。

気がつく、ピンクヘイズのおっぱいはイーグルの至近距離にあった。あと数センチ近づいたら、彼女のおっぱいがイーグルの上腹部あたりに接触しそうだ。

「おっぱい、めっちゃ見てるねー♪ いいんだよー、もみもみしちゃっても。ほら、柔らかくて気持ちいいよー?」

そう言いつつ、ピンクヘイズはおっぱいをイーグルのスーツに押し当ててくる。

むにゅっ……

「お、おおっ」

ピンクヘイズの柔らかな感触と、そして甘い匂いにさらされ、

イーグルはついに勃起してしまった。スーツの中で、痛いほど膨らんでいる。

スーツを着ているときに勃起したことは今までなかったが、非常に頑丈ながら伸縮性に優れた生地であり、かつ体にぴったりフィットしたスーツであるゆえに、股間部分が勃起ペニスの形に膨らんで浮き出してしまうっており、実にみつともなかった。当然、ピンクヘイズからもすぐに見て取れたようだ。

「あはっ、おちんちんおっきくなってる♪ ほらあ、どきどきしちゃってるんだったら、素直になっちゃいなよ!」

「む、むう……」

彼女のエロさを目の当たりにしているうちに、性欲に背中を押されて、この誘いに乗ってもいいのではないかという気持ちでどんどん膨らんでくる。

悪の組織に入れというのなら断るしかなかったが、単にピンクヘイズとエッチなことをするだけいいのなら、むしろ戦わずに済んで都合がいいのではないか。誰も傷つかずに済むのだから。

ついそのように思ってしまったが、イーグルは首を振る。

「い、いかん、スパローの前で敵の女とそういうことをするわけには……!」

「ん? イーグル君って、もうスパローちゃんとそういう関係なわけ?」

「そ、そうではないが……」

「なあんだ、じゃあいいじゃん♪ てか、どうせスパローちゃ

んは気絶してるんだし、気にしなくていいし。いっぱい楽しんじゃおう」

そして、ピンクヘイズは指先でイーグルの股間を撫でてくる。「う、ううつ！」

びくり、とイーグルは体を震わせ、背筋を少し反らすような格好になる。ピンクヘイズの指先は、柔らかくペニスの筋をなぞるように這わせてきた。スーッと越したが、しっかりと感触がある。

「ね、気持ちよくなっちゃおうよ」
むにゅっ……

ピンクヘイズのおっぱいがイーグルの体に押し付けられる。髪からは甘い、金木犀のような香りがして、だんだんと意識がくらくらしてくる。

それに、彼女の蠱惑的な目に見つめられていると、イーグルは目をそらすことができない。

「ほらほらあ、遠慮しなくていいよ？ 私のおっぱい、もみもみしちゃおう」

そして、ピンクヘイズは優しくイーグルの手を取ると、自分のおっぱいに触れさせてくる。

むにゅ……

「う、うおっ、これは……！」
手のひらに伝わる柔らかな弾力に、イーグルの心臓が跳ねる。手で女性の胸に触れるなど初めてのことだ。しかも、手のひらにおさまらないほどの大きさに衝撃を受ける。こんな大きなおっ

っぱいは、触るところか見るのも初めてだ。

(も、揉みたい)

そして、思わずイーグルは手を動かしてピンクヘイズの大きなおっぱいを揉んでしまう。

むにゅ……

「あん♪」

手に大きなおっぱいの柔らかさと弾力が返ってくる。あまりの肉感に、イーグルはそのまま揉みしだきなくなってしまう。そして、おっぱいに触っているうちに、股間にさらに熱が集まってくるのを感じる。

「うつ……」

イーグルは心臓の鼓動も加速するのを感じる。目の前のピンクヘイズの妖艶さを見つめ続けてしまっていることもあって、どんどん興奮が高まってくる。

もっとおっぱいを激しく揉みしだきたい。そんな欲求が高まってくる――

「おっぱいもいいけど、こういうこともしたくない？ うふふ……♪」

ピンクヘイズはイーグルに顔を近づけてくる。柔らかそうな唇が迫ってくる。

イーグルはまさかと思った。いくらなんでも、敵同士の男と女でここまでするのか……？ と。

そして――！

※この先は、製品版でお楽しみください。

●注意事項

- ・この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などには一切関係ありません。また、犯罪行為を助長または肯定する目的は一切ございません。
- ・この作品内で性行為をしているキャラクターは、すべて成人しています。
- ・この小説の著作権は、サークル「神倉流同好会」および、作者の「ヒサミコウ」が所有しております。また、表紙・裏表紙イラストおよび挿絵の著作権はサークル「もしば杏子」の「なふたん」氏が所有しております。

2026年 8月 1日 初版

奥 付



発行 神倉流同好会
著者 ヒサミコウ
URL <https://ci-en.dlsite.com/creator/1105>

イラスト なふたん
URL <https://ci-en.dlsite.com/creator/75>

印刷 同人誌印刷るるる <https://rururu-p.com/>

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<https://sss.sylphid.jp/>)